I I
学図
小国306

文部省検定済教科書

財団法人 教育図書研究会編修

教科書文庫
6
810
34-1949
0130449768

三年生の 国語 下

小KC
G16

学校図書株式会社発行

60305
教科書文庫
6
810
34-1949
01304
49768

寄贈
教科書文庫
6
810
34-1949
0130449768
広島大学図書
0130449768

昭和二十四年十月十日　文部省検定済小学校国語科用

三年生の国語　下

学校図書株式会社

廣島大学
教育學部圖書

中央図書館

先生がたへ

(一)本書の編修方針

(1)編修にあたっては「学習指導要領」(国語科編)を基礎とし、更に、(イ)「検定基準」(ロ)カリキュラム構成及び国語教育に関する最新の研究、(ハ)望ましい教科書についての世論調査、(ニ)児童の言語生活の実態調査、(ホ)進歩した外国教科書の比較検討の結果などを参考としました。

(2)編修者によって選ばれた材料は、更にこれを実際に児童に実験し、また、教育学者、心理学者、言語学者、文学者、教育実際家などの意見を徴して、修正を重ね、完璧を期しました。

(二)本書の特色

(1)単元的構成　各単元は、児童生活の展開、国語科の特色、並びに地域性への適応を考慮して、周到に選ばれております。従って全国いずれの学校でも、児童の生活に即し、他教科と有機的関連をもった国語教育を、有効適切に行うことができます。

(2)「生きたことば」の指導　児童の日常生活における「生きたことば」を教材としてとりあげ、潑剌とした言語学習が系統的に営まれるように工夫してあります。従って、「読み」「書き(作り)」「聞き」「話す」力を一体的に養いながら、ことばそのものに対する関心と興味を次第に深めることができます。

(3)児童の興味の重視　児童の興味を重視して、明るく、楽しい読み物としての性格を具えていることも、本書の特色の一つごりります。児童の経験を広め、感情を豊かに[illegible]ために、多方面の材料が準備されて[illegible]

(4)表現の吟味　表現は明確平易で[illegible]に親しまれやすいように工夫しました[illegible]及び語彙の提出方法にも注意をはら[illegible]ージにおいて、新語並びに新出文字が[illegible]く三つ以上に出ないように努めました[illegible]

(5)新しい生活態度の養成　それ[illegible]性を伸ばすとともに、広く社会人と[illegible]同性を培い、民主的な生活態度を身に[illegible]せるための材料が豊富に採られております。

(6)補助材料の準備　本書をより有効に使用するために、教師用書、児童用ワーク・ブック、朗読レコードなどの補助材料の編修を企画しております。

広島大学図書
0130449768

もくろく

一　童話の国……四
おかしとルビー……四
かざりまどの中のねこたち……十二

二　私たちのことば……三十
身ぶり遊び……三十
おつかい……三十六
にいさんのめがね……四十二
生れかわったさる……四十七

三　お日さまのこどもたち……六十
ことばの表……六十二
かん字の表……六十四

おかしとルビー

どこともしれぬ、遠い国のお話です。王様のごてんに、お気にいりのりょうりばんがありました。王様は、このりょうりばんのこしらえたごちそうが、いちばんおすきでした。りょうりばんがお気にいりでしたから、そのおかみさんも、ごてんの中のおしごとをさせていただくことができました。おかみさんのやくめは、食堂の、金や銀の品物をみがくことでした。しょうじきで、しごとを一心にやる、いいおばさんでしたから、ごてんの役人たちも、大へんに、しんようしてくれまして、とうとう、王様のかんむりのおそうじまでも、この人にさせるようになりました。

りょうりばんのおかみさんは、朝にばんに、自分のしごとを、せいだしてやっておりました。

ある日のこと、広い食堂のすみの方で、せっせと、かんむりをみがいております。と、どうしたはずみか、いちばん大きな、まっかなルビーが、ころころとかんむり

から、ころがり落ちました。ころ、ころ、ころと、はしごだんをすべり落ちて、お庭へ。そして、とうとう、お庭の外の下水のたまりへころがりこんでしまいました。

おかみさんは、まっさおになって、だんなさんの、りょうりばんのところへ、とんでいきました。

ちょうどその時、りょうりばんは、きれいな、赤いキャンデーを作っていました。キャンデーというのは、おさとうで作った、あめ玉のようなおかしです。

あんまりおかみさんがしんぱいして、ぶるぶるふるえますので、

「しかたがないから、これをルビーのかわりに、そのあなへ

つめておこう。だれにもわかりゃしないよ。見ているだけなら、キャンデーもルビーもおんなじさ。」

といって、できたてのキャンデーをやりました。

かんむりにつけた赤いキャンデーは、ルビーのような色をしていましたので、だれも、ほんものでないとは、気がつきませんでした。

それから十日ばかりたちました。

王様と、女王様は、王子様の遊びべやで、ごいっしょに、遊んでいらっしゃいました。

王子様は、まだ二つの赤ちゃんでしたから、よくなきました。王様は、赤ちゃんをわらわせたいばかりに、頭から、かんむりを取って、ゆかの上において、おもちゃにさせておやりになりました。

いきなり、女王様の口から、

「きゃっ」

という、さけび声が出ました。

「どうしたのだ、何ごとがおこったのだ。」

「王様、たいへんでございます。ルビーがなくなりました。王子がのみこんでしまったにちがいありません。こまったことになりました。どうしたらいいでしょう。」

ごてんの中は、上を下へのさわぎになりました。みんな、まごまごするばかりで、なんにもいいくふうがうかびませんでした。

赤ちゃんの王子様だけは、大そういいごきげんで、小さなベッドの中にねかされて、てんじょうをながめながら、にこにこと、わらっていらっしゃいました。

このさわぎは、間もなく、おだいどころのりょうりばんふうふの耳にもはいりました。二人は、あとのことはなんにも

考えずに、王様のところまでかけつけました。

「さぞ、おしかりをうけるだろう。どんなにおそろしいめにあわされるかわからないけれど、王様と、女王様を、早くごあんしんさせてあげなければならない。自分たちは、人の目をだまそうとしたのだから、どんなにひどいめにあっても、しかたがない。」

と決心して、王様に、この間のしくじりを、しょうじきにはくじょういたしました。

「――でございますから、女王様、けっしてごしんぱいあそばすことはございません。王子様のおのみこみあそばし

たキャンデーは、もうすっかり、とけてしまっております。」

と、おかみさんがいいますと、王子様は、そのことばが、よくわかるようなふうに、声をたてて、うれしそうにおわらいになるのでした。

王様と女王様は、だいじな王子様のおからだに、なんのさわりもなかったことをよろこんで、りょうりばんのおかみさんのしくじりを、ゆるしておやりになりました。

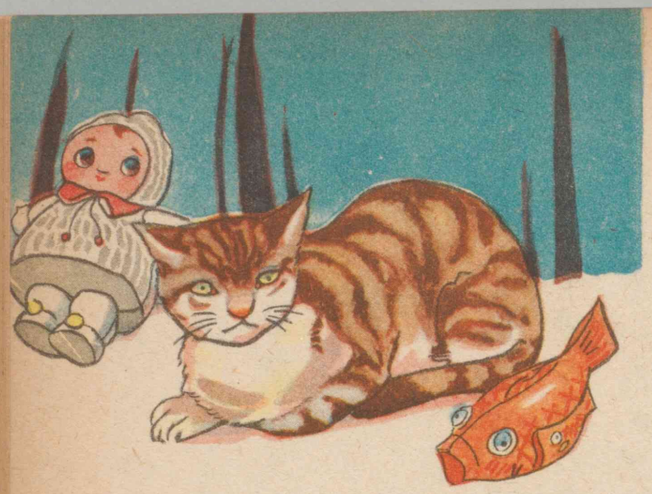
かざりまどの中のねこたち

一

ある町に、小さなおもちゃ屋がありました。その店の主人は、もうだいぶ年をとったおじいさんで、おばあさんと、トラというねこといっしょに、しずかにくらしていました。

朝ばん、ていねいにはたきをかけるお店のおもちゃは、みんな古びていて、お客もめったにありませんでした。

トラは、日のよくあたるかざりまどの中が、いちばんすきでした。トラが、この中にねていると、古ぼけたおもちゃより、ずっとりっぱなおもちゃのように見えました。



「ね、おかあさん。あの大きなねこを、買ってちょうだい。」

通りかかったこどもが、そんなことをいってねだることがあると、トラは、耳をぴくぴく動かして見せるのでした。

そして、ねむりあきると、きちんとすわって、外のけしきをながめながら、世の中はもう平和になったのだから、お店のおもちゃも、どんどんうれて、しんせつなおじいさん、おばあさんも、しあわせになれるだろうと、楽しみに思うのでした。

けれども、いっこうにそのようすも

ありません。たまに、立ちどまって、かざりまどの中をのぞく人はあっても、トラのふとりかたにかんしんするばかりで、おもちゃを買っていく人は、めったにありませんでした。

二

寒い風のふく、ある夕方のことでした。

帰りを急ぐ人たちがガラスのむこうを通るのを、ぼんやりながめていたトラは、ふいに目の前に、見知らぬねこの顔があらわれたので、びっくりしました。

そのみけねこは、やせてはいるけれど、ひんのいい顔で、ガラスごしにのぞきこんでいました。

「もしもし、トラねこのおじさん。このへんに、わたしたちをとめてくれるところはないでしょうか。」

「なに、わたしたちだって……。」

トラは、ほそい目をまんまるくして、聞き返しました。

「ええ、ここに、子どもたちがいるんです。」

トラは、ガラスにはなをおしつけるようにして、外を見おろしました。すると、みけの足もとに、かわいい子ねこが三びき、ふるえながら、うずくまっています。

トラは一目見て、きのどくになりました。

そして、うしろにたれている、青いカーテンを大急ぎでくぐりぬけ、おくの居間で、のんびりたばこをすっているおじ

いさんのところにかけつけると、ぐいぐいと、そでをひっぱりました。

「おや、なんだい。もう、夕ごはんのさいそくかね。」

おじいさんはわらっていましたが、トラがあんまりひっぱるので、とうとう立ちあがりました。

「わかった、わかった。ねずみを取るのにじゃまだから、何か、どけてくれって、いうんだな。」

ひとりごとをいいながらついて来たおじ

いさんは、店の前に、三びきのこどもをつれたみけねこが寒そうにすわっているのを、見つけました。

「これは、これは、うちのトラのお客さまだね。さあさあ、早くお通し申せ。」

気のいいおじいさんは、三びきの子ねこを、ひょい、ひょいと、つまみあげると、家の中にひき返しました。

「しんぱいすることはないよ。それはやさしいおじいさんだから。」

トラのことばに安心したみけは、おずおずと、あとにつづきました。

「おばあさんや、子どもづれのねこが来たよ。ちょっと来て

ごらん。」

おじいさんの声に、だいどころから、人のよさそうなおばあさんが、出て来ました。

「うちのトラに、とめてくれと、たのんだとみえるよ。そこでトラが、わたしをひっぱり出したというわけらしい。」

「まあ、こんなにやせて。よっぽど、くろうしたとみえますね。いいとも、いつまでも、うちにおいでよ。」

おばあさんは、やさしく、みけの頭をなでました。みけはうれしくて、なみだが出ました。しんぱいそうな顔をしていた子ねこたちも、いつのまにか、小さな三つのまりのようにふざけだしました。

その夜、ひさしぶりで、おなかいっぱいごちそうをたべたみけの親子は、楽しいゆめを見ました。

三

この家に来てから、子ねこたちも、めっきり大きくなり、トラといっしょに、毎日、かざりまどの中で遊ぶようになりました。

そのようすを、わらいながら見ていたおじいさんは、ふと、「このかざりまどでは、少しさびしいな。」と、思いました。そこで、大ふんぱつして、あたらしいおもちゃを、しいれることにしました。

もようがえをした　かざりまどの中は、急に明るくなりました。色とりどりの人形や、遊びどうぐや、楽器などが、にぎやかにならべられました。

よろこんだのは、子ねこたちです。

ジープにまたがったり、ふうせんをとばしたり、キューピーさんとにらめっこしたり、それはそれは、大はしゃぎでした。

もっきんや、ピアノや、たいこの上にとびのって、ピン、ポン、デンと　音がした時は、すっかりおどろいてしまいました。それから、子ねこたちは、楽器がいちばん気にいって、でたらめにならしては大よろこびでした。

そのようすを見ていたおかあさんのみけが、ある日、

「ね、トラのおじさん。こどもたちに、音楽を教えてみましょうかしら。」

といい出しました。

「え。お、ん、が、く、だって。」

「ええ、わたしはもと、音楽の先生のうちにかわれていましたので、いくらか、聞きおぼえている曲もあるものですから。」

「なるほどね。いい思いつきだ。こどもさんたちも、すきらしいからね。」

トラもさんせいしました。

「でも、こどもたちがしっかりおぼえるまで、どこにも、ないしょにおねがいしますわ。」
みけのおかあさんは、何か、考えがあるらしく、そっと、ささやきました。

四

ある夜、おじいさんが、ふと目をさましますと、お店の方から、コロン、コロン、ポン、デンデンという、きれいな音が聞えて来ました。
「はてな。」と思ったおじいさんは、おばあさんをゆりおこして、そっとかざりまどのカーテンのかげから、のぞいて見ま

した。
月のうす明りに、三びきの子ねこが、一ぴきはピアノ、一ぴきはもっきん、一ぴきはたいこを鳴らしているのです。

ポン　コロン　ポン　コロン
デン　デン
コロン　コロン　ポン　コロン
デン　デン

そばで、手をふりふり、教えているのは、おかあさんのみけです。
おじいさんとおばあさんは、あきれ

たように、顔を見あわせました。

「ちかごろ、ひるま、おとなしくしていると思ったら、夜中に、こんなことをはじめていたんだよ。」

「まあまあ。でも、わたしたち、知らぬ顔をしていてやりましょうよ。とちゅうで、よしてしまうといけないから。」

おじいさんとおばあさんは、そうだんして、あくる日、かざりまどの中に、小さいぶたいをこしらえて、その上に三つの楽器をならべてやりました。それから、ねこたちには、美しいリボンとネクタイをつけてやりました。

それからも、ねこたちの音楽のれんしゅうは、毎ばんつづきました。はじめは、ときどきまちがえたりしましたが、一

日一日と、じょうずになっていきました。

おじいさんとおばあさんは、毎ばん、ねどこの中でそれを聞くのが楽しみでした。

五

朝からよい天気の日曜日のことでした。ぽかぽかと春のようにあたたかいかざりまどの中で、ねこたちは、しきりに何かそうだんしているようでしたが、さて、その日のおひるすぎ、どんなことが、始まったでしょう。

おじいさんの店のかざりまどの中から、とつぜん、美しい音楽が、泉のように流れ出して来たのです。

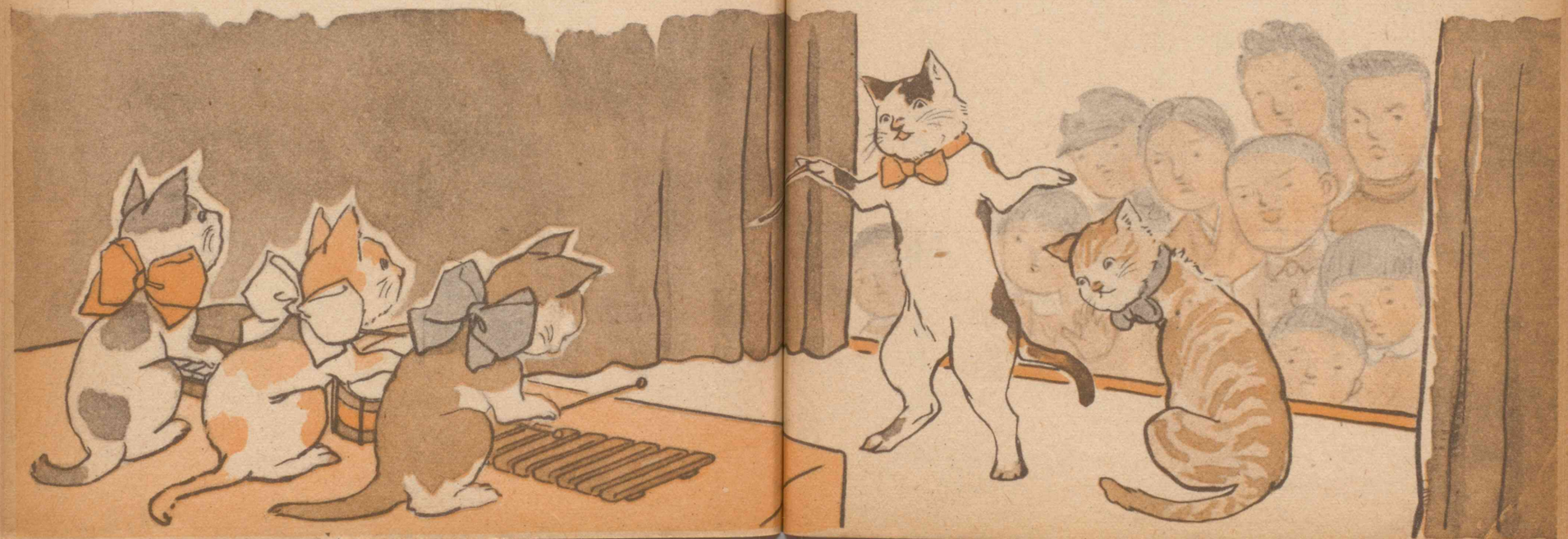
ポン　コロン　ポン　コロン
デン　デン
コロン　コロン　ポン　コロン
デン　デン

「おや、ねこのオーケストラだ。」

「これはおもしろい。」

子どもたちが、おおぜい、かけつけて来ました。おとなも集まって来ました。通りがかりの人たちも、二人、三人と足をとめて、しまいには、黒山のような人だかりになりました。

小さなぶたいの上で、ピアノをたたいているのは、赤いリボンのシーちゃん、もっきんは青いリボンのアーちゃん、たいこは黄リボンのチーちゃん。おかあさんのみけが、ひげとむねをピンとはって、両手をふって、しきをしています。トラも、そばで、こっくり、こっくりと、首でひょうしをとっています。



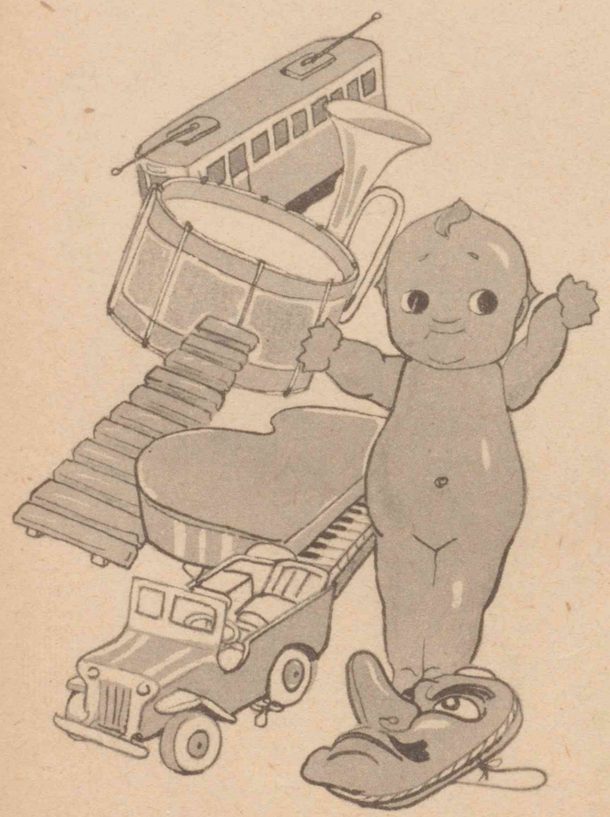
それは、りっぱなえんそうぶりで、ラジオでほうそうしてもいいくらいでした。とりまいた人たちは、「もう一度。」「もう一度。」といって、いつまでもはくしゅをやめませんでした。ねこたちは、なん度くりかえしてえんそうしたか、わからないくらいでした。

やっとおわりますと、みんなは、われもわれもと、店のおもちゃを買って帰りました。

このことが、あちこちに知れわたると、つぎの日も、そのつぎの日も、お店はにぎわいました。

おじいさんと、おばあさんは、たいそうよろこんで、あたらしいおもちゃをたくさんしいれて、やすく売り出し、子どもたちをよろこばせました。

きょうも、このお店では、楽しい音楽が、始まっていることでしょう。



私たちのことば

身ぶり遊び

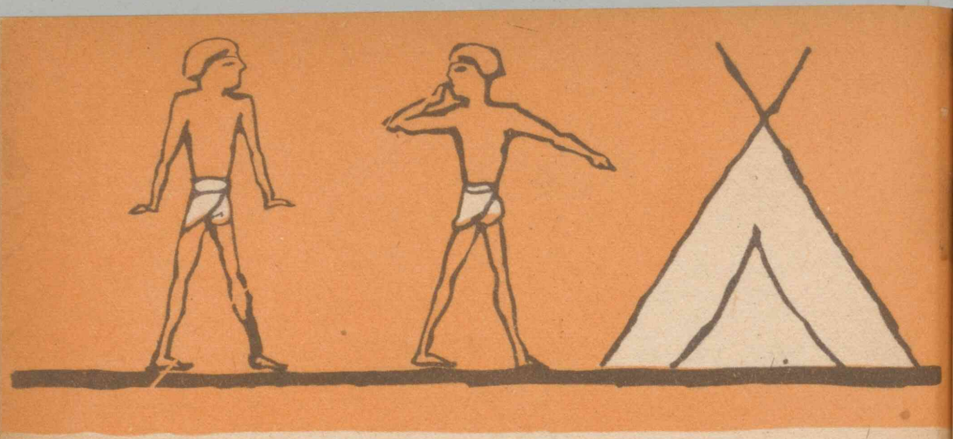
一

次のページの絵をごらんなさい。

テントと、ふたりの人が書いてあります。

左の人は、両手をだらりとさげています。手のひらは下に向けています。「もうだめだ。」とか、「何も持っていない。」とかいう時のかっこうです。

右の人は、かた手でテントをさし、かた手を口にあてています。手を口にあてることは、「たべること」や、「たべもの」をいみします。



この絵は、「テントの中にたべものがない。」ということをあらわしているのだそうです。

大むかしは、ことばが、まだよくできていませんでした。それに、ことばがいろいろで、ある村と、となり村では、もう使うことばがちがっていました。

それで、こんな絵に書いたり、じっさいに身ぶりをしたりして、思うことを知らせあったのです。

二

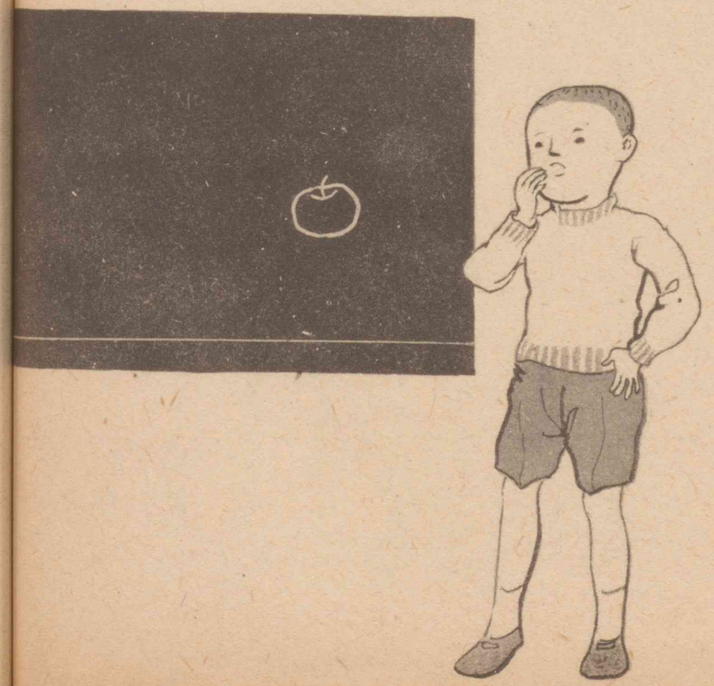
みのるくんが、みんなの前に出て、身ぶりでお話をしました。

まず、指で自分をさし、それから、りんごの絵を黒板に書いて、たべるまねをしました。

「りんごをたべる。」

「りんごがたべたい。」

ということだとわかりました。



ふみ子さんは、「かねがなったら外へ出て、なわとびをしましょう。」という身ぶりをしました。これもみんなにわかりました。けれども、「今度遊びましょう。」といっているのか、「前に遊んだ。」といっているのか、わからないということになりました。

ことばを使わないでお話をすることができますか。みなさんも、やってごらんなさい。「身ぶり遊び」とか、「ジェスチュア遊び」とかいう遊びもありますが、知っていますか。

三

今度は、「よく身ぶりを使う人、使わなければならない人は

だれか。」というもんだいを考えることになりました。

まさおくんが手をあげて、

「それは先生です。ぼくたちがしゃべっていると、すぐ、指を口にあてて、話をやめというあいずをします。」

といいました。

先生はおわらいになって、

「みんなは、先生にさしてもらいたい時手をあげるから それはみんなだね。」

とおっしゃいました。そして、両手をずっと前の方に平らにのばして、

「さあ、野球で、こうやったらなんでしょう。」

とおっしゃいました。みんなで、

「セーフ。」

と答えました。先生は

「アンパイアが、何も身ぶりを使わないでいたら、どうだろう。」

とおっしゃいました。

身ぶりを多く使うおしごとは、まだあります。

なんでしょう。

おつかい

学校から帰ると、おかあさんが、

「きょう子ちゃん、ひと休みしたら、くつ屋さんへおつかいにいってちょうだい。この間たのんでおいた、おとうさんのくつのしゅうぜんが、もうできているはずだから。」

とおっしゃいました。私が、

「今すぐいって来ましょう。」

といったら、おかあさんは、

「そう、それではね、『お代はいくらですか。あした、おかあさんがはらいに来ますから。』と

いって、聞いて来るのですよ。」

とおっしゃって、ふろしきを用意してくださいました。

くつ屋さんまでは、十五分くらいかかります。私は道々、

「くつ屋のおじさんがいれば、知っているからいいんだが。」

と思いながら、歩いていきました。

くつ屋さんまで来てみると、どうしたのか、きょうは、入口のガラス戸がしまって、きちんとかたづいています。私は戸を少しあけて、

「ごめんください。」

といいました。中から、おばさんらしい人が出て来ました。

「あの、くつができたでしょうか。」

というと、
「どなたでしたかしら。」
と聞かれてしまいました。そうそう、こういう時には、みょうじを先にいわなければいけないと、いつもおかあさんから注意されていたのを思い出しました。
「池田です。」
「ああ、池田さんですね。できております。」
といって、くつを出して来ました。そ

れから、
「ふろしきをお持ちですか。」
といって、ていねいにつつんでくれました。
「お代はいくらでしょうか。あした、おかあさんがはらいに来ますけれど。」
「二百七十円です。」
私は、二百七十円というのをわすれてはいけないと思って、「二百七十円」「二百七十円」と、口の中でくりかえしながら歩きました。少し歩くと、また、わすれはしないかと思って、「二百七十円」と口の中でいってみました。歩いていても、気が気ではありません。

とうとう、うちに着きました。
「ただいま。おかあさん、はい、二百七十円。」
といって、おかあさんにおわたししました。
「ごくろうさま。きょう子ちゃん、町はにぎやかだったでしょう。」
と、おかあさんがおっしゃいました。
「二百七十円というのをわすれるといけないから、あんまり方々見ないで来たの。」
と、私がいいますと、ちょうど学校から帰って来たおにいさんが、
「きょう子、そんなのわけないよ。『フナレ』と、おぼえて来

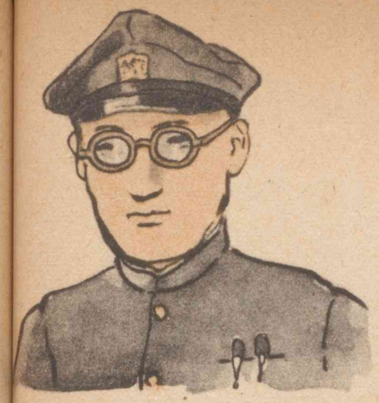
ればいいんだよ。」
といいました。おかあさんは、
「そう。それでも、やっぱりわすれることがあるから、そんなにわすれそうな時は、えんぴつでもかりて、ちょっと、どこかに書いて来ればよかったのね。」
とおっしゃいました。そして、ふろしきをあけてみたら、くつの中に、

浜田森　２７０円

と書いた紙きれがはいっていました。

にいさんのめがね

ぼくのにいさんは、めがねをかけています。朝など、まだめがねをかけない時は、おもしろい目つきをして、ぼくの顔を見たり、おとうさんとお話をしたりしています。とても細い目をします。



それがめがねをかけると、急にぱっちりと大きい目をするのです。

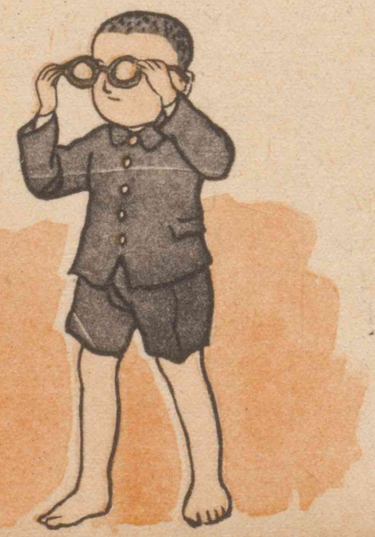
「にいさん、めがねをかけないと、なぜそんなに細い目をするのですか。」

とたずねますと、

「なぜって、目を細くすると、よく見えるようになるのだよ。めがねをかけないと、字がはっきり読めないし、人の顔もよくわからない。ちか目はとてもふべんなものだよ。みのるも、あんまり本にくっついて字を読むと、目を悪くするよ。」

といわれました。

にいさんのめがねをかりて　のぞいてみましたら、ふしぎなことに、にいさんのうしろにすわっていらっしゃるおかあさんが、とても小さく見えるの



です。

「にいさん。にいさんのめがねは、物が小さく見えますね。こんなに小さく見えては、こまるでしょう」。

といいますと、

「小さくは見えないよ。ぼくがめがねをかけると、ぼんやりしているものが、はっきり見えるのだよ。まんじゅうでも、みかんでも、ちっとも小さく見えないよ」。

といいます。

ぼくは、「あんなに小さく見えるのに、おかしいなあ」と思いました。

次の日曜日でした。

にいさんが、めがねをはずして、おふろにはいっていました。

その間に、ぼくはちょっとめがねをかけて、あちらこちらを見まわしました。なんだかぼんやりとしていて、ちっとも見えません。

めがねをはずしてよく見ますと、にいさんのめがねは、さらのようにくぼんでいるのです。

ぼくはなんの気なしに、めがねのさ

らに、そっと水を入れてみました。
すると、たいへんふしぎなことが起りました。
水を入れためがねでは、本の字も、指も、みんな大きく見えるのです。
「これはおかしいぞ。」と、思って、あちらこちらに持ってまわって、見て歩きましたが、どれもこれも、大きく見えます。
小さく見えていためがねの玉が、水を入れると、大きく見えだしたのです。
「にいさんのめがねは、虫めがねにもなるのだな。」
ぼくは、思わずひとりごとをいいました。

生れかわったさる

—げき—

一

だいの上に、両手で目をふさいだ「みざる」(女の子)、口をふさいだ「いわざる」(男の子)、耳をふさいだ「きかざる」(男の子)、——の三びきのさるがすわっている。
まくがあくと、みちお、さだお、たき子が、ハイキングのすがたで、歌いながら出て来る。
みちお　(三びきのさるを見て)「おや、へんなさるがいるよ。」
さだお　「あ、これはみざる、いわざる、きかざるというんだ。」
たき子　「どうして、見たり、いったり、聞いたりしないんで

しょう。

さだお　「だれかにとめられたんだろう。」

——みちおはきかざるのそばへ、さだおはいわざるのそばへ、たき子はみざるのそばへよってみる。

みちお　「このさるなんか、目をあけて見ているだけで、小鳥の声も、ぼくらの話し声も、まるで聞えないんだろうね。」

たき子　「そうよ。このおさるさんだって、聞くことはできても、きょうの空がきれいなことも、花がさいていることも知らないのだわ。きっと。」

さだお　「このいわざるもへんたよ。見ても、聞いても、ひとことだっていわないんだから。」

みちお　「何も聞かれないんだったら、水にもぐっているように、苦しいだろうね」。

たき子　「わたし、見たいものを見るなといわれたら、なきだしてしまうわ」。

さだお　「ぼくは、心に思っていることがいえなかったら、がまんができないよ」。

たき子　「ほんとに、きのどくなおさるさんたちね」。

さだお　「さあ、いこう。ぼくたちは、見たり、聞いたり、歌ったりして、元気にいこう」。

たき子　「ええ、さようなら。かわいそうなおさるさんたち」。

——みんなで歌いながらいく。

二

いわざる　（口から手をはなして……）「かわいそうなおさるさんって、ぼくたち、そうかもしれないなあ」。

みざる　「あら、いわざるさん。あなた、口をきいてはいけないのでしょう」。

いわざる　「だって、今の話を聞いたら、だまってなんかいられないよ。きみも、その手をはなしてごらん」。

みざる　（そっと手をはなして、あたりを見る）「まあ、きれいな空だこと。花もさいているのね。あ、あなたの顔も見えるわ」。

いわざる「ほら、きみだって、手をはなして、見たいものを見た方がいいだろう。」

みざる「そりゃそうね。」

きかざる「どうしたの、きみたち。」

みざる（手まねをしながら大きな声で）「きかざるさん、もうみざる、いわざる、きかざるをよしましょう。」

きかざる（びっくりして首をふる）

いわざる（きかざるの耳へ口をよせ、大きな声で）「いいことがあるから、早く手をおとりよ。」

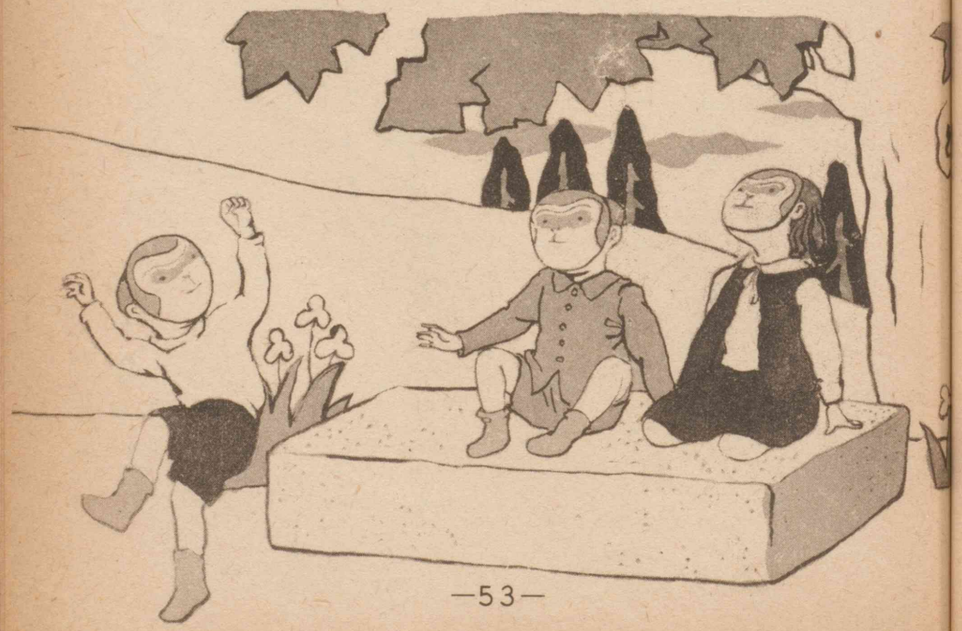
きかざる（みざる、いわざるの方を見ながら、そっと耳から手をはなす）

みざる「わたしたち、なんでも見えて、聞けて、いえた方がいいわ。」

きかざる（きょろきょろして）「うん。あ、小鳥が鳴いているね。おや、うしの声も聞える。これはいい。」

——みんなだいの上からおりる

いわざる（よろこんで）ぼくは、おしゃべりがしたくなったよ。さあ、今から、なん



でもいうよ。いいたいことをいうよ。大きな声でいうよ。今まで、いいたくて、いえなかったことをいうよ。ああ、うれしい。わあい。」

きかざる「うるさいね　もっと静かにしてくれよ。」

いわざる「だって、せっかくいえるんだもの、何をいってもかってだろう。」

きかざる「でも、やかましいよ。」

いわざる「それだったら、きみは、聞かないようにすればいいだろう。聞きたいものだけ、聞けばいい。」

きかざる「うるさいったら。」

いわざる「うるさくないよ。」

きかざる「なに。」（と、いわざるをつく）

——いわざる　つかれて、よろめく。いわざる、おこって、

きかざるにつかみかかる。

みざる「およしなさいったら。わたし、けんかなんてだいきらい。そんなもの見たくないわ。」（と、だいの上に帰って、両手で目をふさぐ）

きかざる「ぼくも、こんなおしゃべり、聞きたくない。」（と、おこって、耳をふさぎ、だいの上に帰る）

いわざる「ぼくだって　きみなんかと話したくはないよ。」（と、口をふさいで、ぷんぷんしながら、だいの上にのぼる）

三

――しばらくして、みざる、手をはなす。きかざる、いわざるも、手をはなす。

みざる　「ほんとうに美しいわ。やっぱり、目をあけていた方がいいのね。」

きかざる　「うん、ぼくも聞いた方がいい。いわざるくん、おしゃべりしたかったら、してもいいよ。」

いわざる　「もうしないよ。さっきは、はじめて物が言えたので、人のことも考えず、言いたいことを言ったのさ。ごめんね。」

きかざる　「いや、ぼくが聞きなれなかったものだから。」

みざる　「わたし、せっかく目をあけたのだから、りっぱな物や、りっぱなことが見たいわ。」

いわざる　「そうだ。ぼくも、だいじなことだけ、言うことにするよ。」

きかざる　「ぼくは、なんでも聞きたいけれど、うそや、悪口や、つまらないことは聞きたくないね。」

みざる　「さあ、わたくしたちも、さっきのこどもたちのように、楽しく、見たり、聞いたり、歌ったり、話したりしましょうよ。」

きかざる「そうだ。もう、きょうから生れかわったのだからね」。

いわざる「こんなこけのはえただいに乗っていないで、もっと広いところへいこうよ」。

きかざる「それがいい、それがいい」。

——三びきのさるはだいをおりて、かたをくもと、歌

いながらいってしまう。

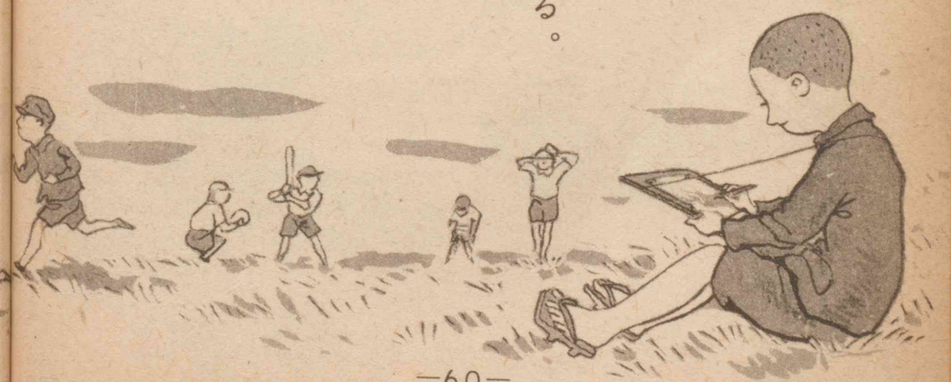
——まくがしまる。

お日さまのこどもたち

絵のすきな子ども、
きょうも、楽しそうに写生している。
お日さまは、そっと、かたごしにのぞいている。

野球のじょうずなこども、
かけ声も勇ましく、ホームランをとばす。
お日さまは、びっくりして、ながめている。

かけくらの早いこども、



ああ、走る、走る。もう、あんなに小さい。
お日さまは、あせをふきふき、追いかける。

音楽のすきなこども、
青空を見あげて、むねをはって歌う。
お日さまは、耳をすましている。

いいなあ、お日さまの光。
元気だなあ。のびていくこどもたち。
日本は明るい。

ことばの表

○あらわれる……十四
あきれる……二十三
あらわす……三十一
アンパイヤ……三十五
○いま……十五
いみ……三十
○うずくまる……十五
うるさい……五十四
○えんそうぶり……二十八
えん……三十九
○おうさま……四
おずおずと……十七
おぼえる……二十一
オーケストラ……二十六
○かんむり……五
がっき……二十
かわれる……二十一
かけくら……六十
かたて……三十
○キャンデー……六
○くろうする……十八
くりかえす……二十八
○げすい……六
○こけ……五十八
○さぞ……十
さいそく……十六
○しょくどう……四
しょうじき……四
じょおうさま……七
しゅじん……十二
しあわせ……十三
しいれる……十九
しきりに……二十五
しき……二十七
じっさいに……三十一
ジュスチュア……三十三
しゅうぜん……三十六
○せいだす……五
セーフ……三十五
○だんなさん……六
だます……十
たいらに……三十四
だい……三十六
だい……四十七
○ちかごろ……二十四
ちかめ……四十三
○つつむ……三十九
○でたらめに……二十

テント……三十
てまね……五十二
○とめる……十五
どける……十六
どなた……三十八
○ながめる……九
なみだ……十八
ないしょ……二十二
○にっぽん……六十一
○ねだる……十三
ネクタイ……二十四
ねどこ……二十五
○のぞく……十四
のんびり……十五
○はくじょう……十
はたき……十二
はらう……三十六
ぱっちりと……四十二
はずす……四十五
○ひん……十四
ひさしぶり……十九
ひとだかり……二十六
○ふるえる……六
ふうふ……九
ふるびて……十二
ふんぱつする……十九
ふろしき……三十七
ふべん……四十三
ふろ……四十五
ふさぐ……四十七
○ベッド……九
へいわ……十三
○ほんもの……七
ぼんやり……十四
ホームラン……六十
○まごまごする……九
まり……十八
まず……三十二
まんじゅう……四十四
○みぶり……三十
みょうじ……三十八
みかん……四十四
○めったに……十二
めがね……四十二
○もようがえ……二十
もっきん……二十
もんだい……三十四
○やくにん……五
やすい……二十八
やきゅう……三十四
やかましい……五十四
○ゆか……八
ゆるす……十一
○よせる……五十二
よろめく……五十五
○りょうりばん……四
リボン……二十四
○ルビー……四

かん字の表

様 (4)	買 (13)	曲 (21)	細 (42)
食 (4)	平 (13)	始 (25)	悪 (43)
堂 (4)	和 (13)	売 (28)	苦 (50)
役 (5)	居 (15)	指 (32)	静 (54)
店 (12)	申 (17)	球 (34)	言 (56)
主 (12)	安 (17)	代 (36)	
古 (12)	形 (20)	注 (38)	
客 (12)	器 (20)	円 (39)	

Copyright 1949, by
The Kyōiku Tosho Kenkyukai

All rights reserved
The text of this publication or any part thereof may not be reproduced in any manner whatsoever without permission in writing from the authors.

小国306

三年生の国語　下

Approved by Ministry of Education
(Date Jun. 30, 1949)

感謝

左の作品を本書に掲載させていただきましたことについて、著作者諸先生に心から感謝をいたします。

おかしとルビー……　村岡花子氏
かざりまどの中のねこたち…　堀　壽子氏
にいさんのめがね……　佐藤和韓鵄氏
お日さまのこどもたち…　神保光太郎氏

編者

東京都文京区大塚窪町
東京高等師範学校附属小学校内
財団法人 教育図書研究会
理事長　東京高等師範学校教授　佐藤保太郎
担当執筆者　東京高等師範学校教諭　田中豊太郎
〃　花田哲幸
〃　青木幹勇
〃　森下巖
〃　小島忠治

表紙とさしえ　田原輝夫　新井五郎

印刷　昭和二十四年六月三十日
発行　昭和二十四年七月四日
定価　円

著作者　財団法人 教育図書研究会
発行者　会長務台理作　学校図書株式会社　代表者　川口芳太郎　東京都港区芝三田豊岡町八番地
印刷者　図書印刷株式会社　代表者　川口芳太郎　東京都港区芝三田豊岡町八番地
発行所　学校図書株式会社　東京都港区芝三田豊岡町八番地

本書の指導書・ワークブック・註釋書並びにこれに類する一切のものの無斷發行を禁ずる。

広島大学図書
0130449768